

全学共通教育における英語リメディアル教育

水野 康一（経済学部教授）

1. はじめに

大学教育の質保証という観点から、本学の共通教育英語では英語力向上のためのカリキュラム改革に取り組んできているが、その教育効果の客観的な指標として TOEIC[®] のスコアを採用している。2018 年度のシラバスより「TOEIC スコア 300 点以上」を 1 年次後期授業（Communicative English II、以下 CE II）の単位修得の条件とすることに定めた。このシラバス変更にともない、学生は危機感をもって授業に取り組み、TOEIC300 点未満の学生の数は前年度比でほぼ半減し（120 名 → 62 名）、平均点スコアも 432.8 点から 454.3 点へと約 5 パーセント上昇した。

しかし、この一方で 300 点という最低基準を満たすことができなかつた学生は、ルールどおり全員 CE II の単位を修得できずに終わった。単位未修得の学生は翌年度 CE II を再履修することになっているが、TOEIC300 点に達していない学生たちについては、何の手当もなされなければ、次回以降も TOEIC スコアが単位取得において大きな障壁となり続けることが容易に想像される。CE II はすべての学部において卒業のための必修科目であるため、彼らは TOEIC300 点が取れるまでいつまでも卒業ができないということになる。

今回のシラバス変更の検討段階において、当然そのような留年生が多く出ることが予想され、この問題の解決救済策も同時に議論された。卒業要件の単位を落とすことを認識しながら TOEIC テスト 300 点に達しない学生は、英語力、特に TOEIC の測定するリスニングとリーディングの力が極端に低い状態にあるといえる。彼らに対しては何らかのリメディアル（治療的）な教育が必要であるという結論に至り、今回のシラバス（合格基準）変更に伴い、不合格者のための補習授業を新たに導入することとなった。

2. CE II Z クラス

補習授業は、予算や担当教員編成の都合上、カリキュラム内で CE II の Z クラス（再履修者専用）として 2 年次の前期に設定された。受講資格は、前年後期の TOEIC スコアが 300 点未満で CE II を不可となった学生に限る、とした（その他の理由で不可となった学生はこれまで通り 2 年次以降の後期に CE II を再履修する）。2 年次になると、学部によっては専門科目との兼ね合いで幸町キャンパスでの履修が困難なことから、幸町、林町、三木町のキャンパスにおいて 3 クラス開講し、筆者がそれらのクラスをすべて担当した。

この授業は CE II の不合格者に対して追加的な教育を行い、単位認定を行うものである。いったん不可になった授業について、別の担当者が後から可否の変更をすることができないため、厳密には 1 年後期の CE II の「補習」としてではなく、新たな CE II の授業として開講する必要がある。このため、受講者の英語力にレベルを合わせつつ、CE II の授業として一定の学習負荷と水準を保つ必要がある。

CE II Z クラスの計画段階においてもっとも大きな問題となったのが、「TOEIC300 点未満＝不可」のルールをどうするかということであった。努力しても 300 点を取れない学生が集められているので、このルールが厳格に適用されると、どんなに授業内外の学習を頑張っても TOEIC で 300 点取れなければ合格できないという「あきらめ」が受講生の学習意欲をそいでしまう。しかしこのルールがなければ CE II が目標とする到達度を客観的に保証することができないというジレンマがあった。

この問題の解決方法としては提案されたのが、英語到達度の測定に TOEIC ではなく TOEIC Bridge[®]を用いることであった。TOEIC Bridge は TOEIC より問題数が少なく、英語力が低い受験生を対象に開発されたものである。

TOEIC は英検（実用英語技能検定）のようなレベル別の試験ではなく、初級者から上級者までの幅広い受験者に同じ試験問題を解かせているが、TOEIC の問題のレベルや設問数の多さが、英語力の低い学生にとって大きな負担となっており、彼らのスコアの信頼性（特に同一受験者のスコアの安定性）がこれまで問題視されていた。CE II Z クラス受講生の英語力測定に TOEIC Bridge を採用すれば、抽出妥当性（テスト項目が受験者のレベルにあっていること）が高くなり、より信頼性の高いスコアを得ることができると考えられたためである。

この 2 つの試験を国内で実施している一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（IIBC）が公開しているスコア比較表によると TOEIC Bridge 試験で 120 点が TOEIC の 310 点に相当するとされており¹⁾、このことから CE II Z クラスでは TOEIC Bridge120 点以上を合格目標点（CE II の TOEIC300 点ルールに相当）とした。

3. 英語リメディアル教育

CE II Z クラスは英語力の低い学習者（スローラーナー）に対するリメディアル教育であることから、目標到達のために独自のシラバスを開発する必要がある。教材選定や授業法の考案のために、まずは Z クラスの受講生となる学生が英語学習上どのような問題を抱えているかを知る必要がある。そこで筆者が担当する英語クラスにおいて、アンケートを実施した。学生が「英語および英語学習についてどのような考えや気持ちを持っているか」という問いに対して自由記述で回答させ、英語に困難を抱えている学習者（TOEIC400 点未満）15 名の回答を抽出した。以下に原文のまま紹介する（下線は筆者による）。

- ・英語はとても苦手な教科だ。言葉そのものは好きだが、勉強は中高通して駄目なままだった。
- ・中学、高校の時から英語に対する苦手意識が強くて、英語の勉強から避けてきました。大学に入って英語から逃げることはできないと感じています。
- ・高校生のときから英語が苦手だ。高校3年間、担任が英語の先生だったから嫌々勉強していた記憶がある。勉強しなきゃとは思うけど、したくはない。
- ・英語はできるよになれば便利だと思うけど苦手だ。英語の勉強は高校時代でもあまりちゃんとしていなかったので、得意ではない。
- ・英語は将来社会に出たときに必ず役立つが、勉強することはあまり好きではない。英語は苦手だ。
- ・英語を勉強することは嫌いではないが、得意ではない。英語力を身に着けたい。
- ・英語は苦手だ。英語の文法とか特殊な変化が難しい。英語は話す方が好きだ。英語の勉強法が分からない。
- ・英語はものすごく苦手だが今後必要になってくると思うので、勉強しなければいけないと思う。英語をしゃべりたいとは思いますが、勉強していると眠くなる。英語は覚えられない。記憶に残らない。発音は好き。
- ・“英語”自体は好きなのですが勉強になると苦手に感じてしまいます。
- ・英語の勉強はどこから何から何をすればよいのかイマイチわかりません。
- ・大学在学中には英語をマスターして短期留学または個人的に海外に行きたいと考えています。今の私の英語の能力は最悪ですが、少しずつ自分のモノにしたいです。英語を話せるようになって多くの人とコミュニケーションを取りたいです。
- ・高校まで英語をあまり勉強しなかった。でも、ずっと英語にきょうみを持っている。英語の勉強が好きで、これからも気楽で勉強していきたいと思う。
- ・外国人の方に英語で話しかけられたとき、内容は理解できるけど、答えることができなくてわだかまりが残ることが多いなど感じています。今までのセンター試験は、単語と熟語を覚えるだけなので、忘れた分を取り戻したいと思っています。
- ・英語は香川大学に入って大嫌いになったし、英語の評価を TOEIC でされる意味がわからない。仕方ないことだけど英語はもっと楽しくしたいし、単位を取るために楽しくもない勉強をしたくない。こんな勉強をしていても今後使える英語になるとは思えない。言語なんだから楽しく勉強しながら英語をしゃべることができるようになりたい。
- ・英語は世界の各地で使われている言語なので使えるようになりたいが、なかなか勉強が進まない。英語の勉強は少しでもいいので毎日したいと思っている。

上記の記述から、多くの学生は、英語（学習）が「苦手」と表現し、将来英語力が必要になると感じつつも苦手意識から今まで勉強をしてこなかった、回答している。感情的には英語が「好きだ」という人と「嫌い」だという人の両者が存在するように思えるが、彼

らの文をよく読んでみると、英語を「しゃべること」に興味があるが、試験勉強や文法学習など「英語を勉強」することに苦痛を感じているようである。

4. スローラーナーのつまずき

泉(2012)は中高生のスローラーナーのつまずきの原因について1)学習者によるもの、2)指導者によるもの、3)環境によるもの、4)英語によるものに分類して、それぞれ対処法を検討しているが、ここではそれを大学生にケースにあてはめて考える。

4-1. 学習者によるもの

学習意欲や動機づけと学習行動との関係において、「学習意欲がなくてできない」場合と「学習意欲はあるができない」場合があると考えられるが、上記の学習者のコメントを読むと、彼らは英語が「しゃべれる」ようになりたい、すなわち「英語を話せるようになって多くの人とコミュニケーションがとりたい」という欲求を持ち、統合的に動機づけられてはいるものの、現在の大学の英語の勉強がその欲求と結びついていないと認識しており、学習意欲の向上につながっていないということがわかる。授業内にコミュニケーション活動を取り入れていき、「しゃべる」ためにはリスニング力が欠かせないこと、また語彙や表現を知っていなければ発話することができないということを体験させる必要がある。

文法などの学習内容が難しいことや勉強法が分からないことが意欲の低下につながっていることについては、教師が最も対処しやすい部分である。コミュニケーションにとって必要ではない文法事項の説明や語彙の単純な記憶学習は控えめにし、学習課題も作業中心のシンプルでわかりやすいものにすることが求められる。中高生に比べると少ないと思われるが、大学生も学習障害などを抱えている場合があるので、認知的な負荷の高い抽象的な説明は避け、教科書を補助するプリントなどの補助教材を多く用意する必要がある。

次頁は教科書の補助資料として、筆者が作成し毎回配布したプリントのサンプルである。「授業の予習をしてくなさい」と指示されるだけでは何をやったらよいかわからないと感じる受講生に、自宅でやるべき作業をわかりやすく示した(下線部の語彙を辞書で引き、文脈にあった訳語を空欄に記入させた)。リスニングについては文全体の聴き取りと記憶が困難であるため、教科書の問題を空所補充の形式に変更している。

4-2. 指導者によるもの

教師は英語が「好き」または「得意」で教員になったものが多く、英語が「苦手」な学生がどこでつまずくのか分からず、「英語ができない学生」＝「学生側の怠け」と決めつけて指導が不十分となるケースもある。泉(2012)は「指導者の授業力、人間性や熱意、こちらを向かせる力、相手の心に届く話し方や、話を聞かせ分らせる力など」が求められるとしている。教師と学生一人一人との信頼に基づく人間関係が構築されていれば、学生は教師の期待に応えようとする行動をとろうとすることが知られている(Hawthorn

Lesson 1 CE II Z

学生番号

氏名

p. 7 Exercises ---Listening

音声を聞いて () に語句を入れなさい。下線部の語は後の [] に意味を書きなさい。

Part 1 Photographs

1. (A) The woman is () on her skirt.
 (B) The woman is () an umbrella in her hand.
 (C) They are running into a café to () the rain.
 (D) Both children are () along the street.

2. (A) The man is () snow away with a shovel.
 (B) The man is collecting (). []
 (C) The man is () his coat.
 (D) The man is () garbage. []

Part 2 Question-Response

3. What is the weather like? []
 (A) It was ().
 (B) I like it ().
 (C) It is ().

4. Was the pond frozen yesterday? []
 (A) Yes, but only () the edges. []
 (B) Yes, ().
 (C) No, it's too ().

5. What is the weather forecast for tomorrow? []
 (A) () fine, thank you.
 (B) It () be hot.
 (C) It was () hot.

Part 3 Short Conversations

6. M: It () in the mountains last night.
 W: Oh, it () as if it's very cold there. []
 M: I'm () it is. I can't () to go skiing.
 W: Really? I'm not () in winter sports at all.

7. M: How was your () in Spain?
 W: It was () almost every day. = rainy
 M: Didn't you have any good weather ()?
 W: Well, the last day was fine, so () we went to the beach.

Effect)。そこで、少人数の複数クラスを編成し、教室内では教壇近くに学生座席を固定させた（できるだけ名前を覚え、机間を巡視して後席の学生にも声かけができるようにするため）。

4-3. 環境によるもの

教室や教室外で勉強に集中できる環境を整えることは重要である。近年、小中高校では学級崩壊、大学においても授業中の私語が問題となっている。幸い小規模の英語授業では静穏で秩序ある環境を保つことはそれほど困難なことではない。

また、現代の大学生は授業外において学習時間を確保することが難しいと考えられる。大学生は高校生と比較すると時間があると考えられがちであるが、生活費を稼ぐためのアルバイトやサークル活動、スマートフォンのゲームや SNS で多くの時間を割いており、授業外の学習時間は少なくなっている。上記はいずれも学生自身が制御するしかなく、学習時間確保のためには学生の自覚を促すしかない。教師としてできることは、授業外学習を成績評価と直結させて義務化するほかにないと考え、CE II Zクラスでは前ページのようなプリントを提出課題とした。予習内容は鉛筆で記入し、授業では赤ペンにより自ら修正を行い、授業の最後に提出させた。

予習と授業内での学習状況は平常点として加算していき、一定点数を超えた場合は TOEIC Bridge のスコアに最大 20 点を加算することとした。予習と授業内の活動を毎週きちんと行えば、TOEIC Bridge のスコアが 120 点（TOEIC300 点相当）を下回っても単位が取得できるという見込みが具体的な目標となり、ほぼすべての学生が 13 回のプリント（A4 サイズ 1 枚表裏）を提出した。3 クラス合計のプリント提出率（＝出席率）は 96.4 パーセントと極めて高かった。

5. TOEIC Bridge の結果および CE II Z クラスの成績評価

CE II Z クラスの受講生は 53 名であった。前期 TOEIC で 300 点未満だった学生 62 名のうち授業登録を行った者は 57 名、うち 4 名は履修登録のみで出席はしなかった。なお、途中でドロップアウトする学生は一人もいなかった。

受講生は全員が大学生協を通じて TOEIC Bridge ITP（団体受験用）テストの申し込みを行い、2019 年 7 月 21 日の午前に幸町北 621 教室で試験が実施された。受験者は 53 名（全員出席）で平均点は 128 点、最高点は 152 点、最低点 92 点。53 名中 44 名が TOEIC310 点相当である 120 点以上のスコアをマークし、残りの 9 名中 6 名が 100 点以上（TOEIC 換算 280 点以上）という好成績であった。

最終的な成績評価は受講者 53 名中 50 名が合格した。不合格者のうち 2 名は授業の平常点が合格基準（75 パーセント）を満たすことができず、1 名は TOEIC Bridge スコアの最低点 100 点未満であったことにより不可となった。CE II Z クラスの合格者は、前年度

TOEIC300点未満での不合格から努力した結果、ほぼ全員が TOEIC スコア 300 点相当を取得することができ、授業計画者としては安堵した。

6. CE II Z クラスを振り返って（授業評価結果より）

最終回の授業において独自形式のアンケート調査（Appendix 参照）を行った結果を以下に示す。

Q2 と Q3 はそれぞれ CE II Z クラス（2 年前期）と全学期の CE II の授業外学習時間を尋ねたものである。選択肢に付された番号（1 から 5）を間隔尺度と仮定し、その平均値を求めたところ、CE II Z クラス（2 年前期）は 3.59、CE II（1 年後期）は 2.65 であった。学習時間に換算するとそれぞれ 78 分、50 分で、この授業の予習に前学期より約 30 分程度多くの時間を割いていることが分かる。しかしながら、筆者は授業の予習には授業時間（90 分）よりも長い時間を割いて欲しいと伝えていたので、こちらの期待ほど予習時間は伸びなかったともいえる。

Q4 はこの授業を受ける前の英語についての考えを聞いたものである。平均値は 4.0 で「あまり（全く）英語が好きでない」という否定的な回答が全体の 70 パーセントであった。Q5 はこの授業に熱心に取り組んだかどうかを尋ねたものである。平均値は 1.96 で「おおむね（非常に）そう思う」という好意的な反応が 87 パーセントであり、これはこの授業の出席率の高さにも表れている。Q6 のこの授業で英語の力がついたかという問いについては、55 パーセントが「おおむねそう思う」、35 パーセントが「どちらともいえない」と答えている。英語の力がつかなかったという否定的な反応は少ないものの、わずか 4 か月ほどの期間で英語力の低い学生たちに力がついたと実感させられたことは大きな成果であり、教員にとっても今後のやりがいにつながるものである。この授業は実際の英語力よりも英語学習意欲の向上をねらったものであり、Q7 では受講生のモチベーションの向上を尋ねている。回答の平均値および回答パターンはほぼ Q6 と同じで受講者の 56 パーセントがこの授業で学習動機づけが高まったと回答しており、この授業の目的はあるていど達成されたといえる。

Q10 から Q12 は、この授業についての評価および自身の英語力の変化についての自由記述項目である。以下は、特に多く見られた回答とそれに対しての筆者の考察である。

【目標設定、学習方法の明確化について】

- ・やるべきこと、やった方がよいこと、到達目標がわかりやすかった。
- ・授業の形式が一貫されており、授業の予習がやりやすい。
- ・予習教材があるため、何をしたらいいか明確だった。
- ・宿題プリントがあることで、強制的に学習時間を作れた。
- ・予習しやすい環境がつけられていたと思う。

- ・ Moodle を用いて予習復習ができる。
- ・ ムードルに資料を載せてくれる点。スマートフォンでリスニングすることができた。

最初のガイダンスの授業で、シラバスに記載した単位認定基準とそれをクリアするための条件および学習法について詳しく説明した。わかりにくさを避けるため、毎回あらかじめ決められた授業パターンを繰り返した。おそらく受講生がこれまでやってこなかった授業外学習を習慣づけさせることを目的として、予習プリントを毎回用意したが、これについての学生の評価は高かった。

英語テキストの音声教材の提供は、近年 CD の添付から音声ファイルのダウンロードという形式に置き換わっている。スマホで音楽を聴く時代にあわせた教科書会社の対応であるが、教科書会社のサイトにアクセスするというわずかな手間も学生には面倒と思えるようである。やや甘やかし過ぎにも思えたが、学習支援システム (Moodle) にその週の音声教材をアップロードし、システム上で直接再生できるようにしたことも、学習者側の負担を軽減する効果があったようである。

【学習動機づけとモチベーションの維持について】

- ・ 成績をこまめに開示していただけることがモチベーションにつながり良かった。
- ・ 身近な例を用いて解説されていた点。
- ・ 日常会話や単語のネイティブな意味の細かいところまで教えてもらい、理解が深まった。
- ・ 余計な雑談が多い。授業の時間に関連性のない話をしないでほしい。
- ・ 授業とはかんけいのない話がおおく、さいごのほうがてきとうになっている。
- ・ 雑談がたまに少し多い。
- ・ 雑談をするのは良いが、量が多すぎると感じた。

英語については短期間の学習でスキルが身についたと実感させることは難しい。そのかわりに 3～4 週間に一回程度、課題提出状況 (提出されたプリントから予習や授業内学習について 5 段階で評価) や小テストのスコアを受講生にフィードバックし、自分がどのくらい到達目標 (単位取得) に近づいているかを感じさせ、常にゴールを意識させた。

モチベーションの維持に関して意図したのは、単純な英語問題の答え合わせではなく、授業者の海外体験のほか、英語表現のニュアンスなども伝えて、学習者の異文化コミュニケーションへの興味を持たせようとした。しかしながら、これについては受講生の多くから「無駄話が多い」というコメントが多く寄せられた。海外旅行や英語話者とのコミュニケーションが想像しづらい受講生には、「この表現をこのイントネーションで言うと、ネイティブスピーカーにはこのように聞こえる」という話は、たしかに無駄な話に聞こえたかもしれない。今後は英語表現の付帯的な説明については、内容や量を大幅に見直す必要があると感じた。

【英語や英語学習に関わる自身の変化について】

- ・英語を勉強するのが少しだけ楽しくなった。
- ・英語を頑張ろうと改めて思えました。
- ・予習する習慣が身につくようになった。
- ・意欲的に予習に取り組めるようになった。
- ・高校でも中学英語は復習していなかったもので、改めて理解できた。
- ・学習するにあたってバイト先などで外国人客への対応が少し改善されたように思った。
- ・バイト先で積極的に海外の人と話せるようになり、楽しいです。

大学生にかぎらず、英語力の低い学習者には「英語の勉強のしかた」が分からないと訴える者が多いが、そういう学生は授業外学習に取り組めず、結果として英語授業で置いて行かれていたと考えられる。この授業については学習の手順をはっきりと示すことによって、英語の学習の負担が軽くなり、これまでやらなかった予習の習慣がついたものと思われる。わずか週数時間の予習によって授業を理解できたことが、さらに英語を学びたいという意欲や外国人に話しかける自信につながっており、改めて英語授業において予習の重要性を再認識させられた。

7. おわりに

CE II のシラバスに TOEIC による合格最低基準を設けたことにより、1 年生が後期の英語授業と TOEIC テストに対する取り組みの変化が具体的に数字になって表れ、また TOEIC テストのスコアにより単位を落としてしまった学生についても適切なレベルのリメディアル教育を施すことにより、目標達成による英語の苦手意識克服と英語学習意欲の向上という成果を上げることができた。

一方で、CE II Z クラスの開講に関しては、リメディアル教育としての課題も明らかになっている。今回は 1 年後期の TOEIC テストの結果に基づいて、2 年の前期に実施したが、リメディアル教育を行っている他大学のケースでは、大学入学前かあるいは直後に行っているケースが多い。ある受講生は授業アンケートの回答に「基礎からできていなくて、大学になって英語が一気に難しくなり、よけい分からなくなったけど、この授業で一から学ぶことで、もっと勉強すれば分かる気がすると思った」という感想を述べている。すなわち、この学生および CE II Z クラスの受講生の何人かにとっては、1 年生の共通英語の授業は教育的な意義を持っていなかったということである。多様な選抜方法に経て大学に入学してくる学生全員が一定レベル以上の英語学力を有していると期待できないのが現状である。このため、できれば入学時にプレースメントテストを実施し、教育課程のより早い段階でリメディアル教育が実施できるようカリキュラムの改革を行う必要があると考える。

注

- 1) 15,559 人の受験者のデータをもとに IIBC が独自に算出したもの。サンプルは日本人と韓国人で、平均年齢は 20 歳ということから、日本人大学生にとってはこの変換表の信頼性は高い。詳しくは以下のサイトを参照のこと。

https://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/bridge/pdf/Comparison_BridgeandTOEIC.pdf

参考文献

- 泉恵美子 (2012) 「スローラーナーのつまずきの原因を探る」『英語教育』第 61 巻 4 号、10-13 頁。

Appendix

Communicative English II Z に関するアンケート

授業改善および調査の目的でアンケートを実施します。選択肢のある質問は番号を○で囲んでください。

回答者は決して特定されず、成績にも反映されませんので、正直にお答え下さい。

なお、集計結果および記入された内容は、個人が特定されない形で、報告書等において公表される場合があります。

Q1. 本日の TOEIC 模試の正答数は 100 問中何問でしたか。

- 1) 49 問以下 2) 50-54 問 3) 55-59 問 4) 60-64 問 5) 65-69 問 6) 70-74 問 7) 75-79 問 8) 80 問以上

Q2. この授業の予習復習等で授業以外にどれくらい時間を使いましたか。一週間の平均時間として最も近いものを選びなさい。

- 1) 0 分 2) 30 分 3) 1 時間 4) 1.5 時間 5) 2 時間 6) 2.5 時間 7) 3 時間 8) 3.5 時間 9) 4 時間以上

Q3. あなたは昨年の CEII の授業において授業以外で週平均どれくらい勉強していましたか (English Central を除いた予習復習の時間)。

- 1) 0 分 2) 30 分 3) 1 時間 4) 1.5 時間 5) 2 時間 6) 2.5 時間 7) 3 時間 8) 3.5 時間 9) 4 時間以上

Q4. あなたはこの授業を受ける前、英語または英語学習が好きでしたか。

- 1) 非常にそうである 2) おおむねそうである 3) どちらともいえない 4) あまりそうでない 5) 全くそうでない

Q5. あなたはこの授業に熱心に取り組みましたか。

- 1) 非常にそうである 2) おおむねそうである 3) どちらともいえない 4) あまりそうでない 5) 全くそうでない

Q6. あなたはこの授業で英語の力がついたと感じましたか。

- 1) 非常にそうである 2) おおむねそうである 3) どちらともいえない 4) あまりそうでない 5) 全くそうでない

Q7. この授業を通して英語学習のモチベーションが上がりましたか。

- 1) 非常にそうである 2) おおむねそうである 3) どちらともいえない 4) あまりそうでない 5) 全くそうでない

Q8. この授業内容 (レベル) はあなたにとって難しいものでしたか。

- 1) 非常にそうである 2) おおむねそうである 3) どちらともいえない 4) あまりそうでない 5) 全くそうでない

Q9. あなたは、総合的に判断して、この授業に満足していますか。

- 1) 非常にそうである 2) おおむねそうである 3) どちらともいえない 4) あまりそうでない 5) 全くそうでない

Q10. この授業について良かったと思う点があれば書いてください (自由記述)。

Q11. この授業について改善すべきと思う点があれば書いてください (自由記述)。

Q12. この授業を受けてあなたの英語学習に対する考えや学習行動に何か変化があれば書いてください (自由記述)。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。